

# 災害ボランティアネットワーク通信

福島版  
2014年夏

NPO法人

災害ボランティアネットワーク

茨城県古河市水海道二〇一九

TEL 0280-91-3090

Fax 0280-23-2281

<http://saigaijolunteer.net/>

## 二〇一四年 福島県の現在とは…

## 南相馬市の『今』

二〇一一年三月十一日の大

地震・大津波を引き金として、福島第一原子力発電所は甚大なる被害をもたらしました。

原子炉の爆発とともにまき散らされた放射性物質は、福島県浜通りを中心に東日本の広域を汚染しました。

あの日から三年…

東日本各地に残る地震・津波の被害は、私達の記憶から少しずつ薄れてきています。

そして現在、私達は放射能問題に背を向け、どこか他人事として、現実から目をそらしているのではないのでしょうか。



↑二本松市・同朋幼稚園内にあり、放射線量計測機です。  
福島の人々にとって、放射性被ばくは、今でも現実の脅威なのです。

今回の通信では、福島での活動を通して、私達が見てきたこと、聞いてきたことを、出逢った方々を通してお伝えしたいと思います。

二〇一三年十二月二十一日、NPO災害ボランティアネットワークの代表者である友人の梁河文昌さんと南相馬の地に足を運んだ。福島は、新聞やテレビ、インターネットでさまざまに報道されているが、現状が本当にマスコミの報道している通りなのか、いささか疑いをもっていた。だからいつか、直接自分の目や耳で確かめたいと思っただけだが、諸事情で今までそれが叶わなかった。ところが有り難いことに、定期的にボランティアで福島の本松に足を運んでいる梁河さんが、私に声をかけてくれたのである。マスコミは情報を流すにして

も、その利益を考えざるを得ないので、その情報が国民や市民住民にとってどれほど大切なのかを考慮することよりも、情報をどれだけコンパクトに分かりやすく速く伝えることができるかを優先しがちである。また、国や行政の都合のよい情報だけを流すことにもなりがちである。その結果、伝えられるべきことが伝えられないということが起こってしまう。

今回、直接現場を視察することができて、マスコミの流す情報からでは決して知ることのできない福島の現実や、国や行政の在り方を知ることができた。梁河さん御自身が、今回の視察活動をNPOの活動の一環としてどこまで考えておられたかは分からないが、一緒に行動した私は、「マスコミのようには利益に縛られない非営利団体の活動だからこそ、真実を伝えることができる」という、NPOの新しい可能性を感じることができたのである。

話は元に戻るが、二十日は二本松のホテルに泊まり、二十一日に自動車で、飯館村を通り抜けて南相馬にたどりついた。そこで、南相馬に住みながら、その地に訪れる人々にその現状を報告する仕事をしておられる木ノ下秀俊さんとお会いし、車でいろんなところを案内してもらい、説明を受けた。それをここにすべて記すことは出来ない、以下の三つにまとめることにした。

## ①高濃度の放射能が生活環境に当たり前のように潜むおそろしさ

南相馬はほとんど除染がされていなかった。行政（南相馬市）は、震災後一年以内に除染（基準は、0.23 マイクロシーベルト）を約束したが、それが果たされぬまま二年四カ月が過ぎ、昨年七月には白紙に戻されていたのである。その結果都市濃縮により、特定の箇所

（コケ、石、黒土など）の放射能レベルは、10 マイクロシーベルトを越えているものもあり、それを踏むことは、まさに地雷を踏むようおそろしさがある。



南相馬の土の上で計測。数値は9.085  
マイクロシーベルトを指している。

震災直前に建てられたショッピングセンターは、震災後には全く利用するお客様がいないので経営が立ち行かない状態だったが、周りに仮設住宅を建てたので経営が成り立ち、また仮設住宅の住民にとっても近くにショッピングセンターがあるのはとても便利である。

しかし、ショッピングセンターの駐車場のコンクリートに付着する土が雨に流され、駐車場の隅に濃縮された状態でたまった。

ていた。木ノ下さんが放射能の濃度を測って下さったが、驚くほどの数値だった。まさに都市濃縮の典型である。

説明では駐車場のコンクリートに付着している土の放射能の濃度が高いのは、放射能で汚染された農村部から来る車のタイヤに、高濃度の土が付着していて、それが駐車場のコンクリートに付着するのだろうということであった。しかし、行政にそれを訴えても、「除染しても土を置く場所がない」という理由で除染しないのである。南相馬は除染がほとんどされていないといっても、実は、学校、役場、公民館などはわりあい除染されている。しかし、たとえば竹中工務店が仕切っている除染作業の、その除染した土の仮置き場は、人が住んでいる住宅街のほんの近くにあり、その住宅街の住民にとっては非常に危険である。

ショッピングセンターという日常的に利用する生活に密着した場に、当たり前のように高濃

度の放射能があったことや、住宅街のほんの近くに除染した土の仮置き場があったことにとってもショックを受けたのである。

## ②本当は危険なのに、基準値を上げて安全なことにしてしまおうとする行政と、それを応援する国の無責任さ

木ノ下さんのお話では、南相馬市で近々、健康マラソンがあるらしいが、行政がそのマラソンのコースのポイントに住民たちに立つてもらおうとしたら、断った人たちがいたとのことである。断った人たちは、線量が高いことに気づいている住民たちであるとのこと。健康マラソン開催の狙いは、南相馬はほとんど除染されていない危険な場所なのに、安全であることにしてしまおうとすることにある。

つまり、健康マラソンは名ばかりで、それを開催しようとする動機もこめた意味でまさしく「不健康」マラソンなのである。国は今まで「年に1ミリシーベルト以上が危険」を基準にしていたのが、「20ミリシーベルトまでなら大丈夫」と、基準を上げて来た。除染しても効果が無いなら安全基準を上げるというやり方だが、まさしく開き直りである。その行政の開き直りを国が支持し応援するとう、とんでもない構図があることを、木ノ下さんから教えていただいた。

その説明を聞いていて、「行政は、本当に住民の命を第一に思っているのだろうか？」という疑問が起った。「そうではない」ということを、福島第一原発事故が起った当初の行政の対応を通して、木ノ下さんは教えて下さった。例えば、行政は避難指示を出すタイミングが遅かったが、どうして遅くなつたかと言つと、被害を出来るだけ小さく見せようとした

からであるという。ヨウ素剤があつても配らなかつた理由もそうである。しかも、そのことに対する謝罪は未だに一切ないのである。私は非常に憤りを感じた。



支援のおもな内容は、新鮮な野菜の提供です。

木ノ下さんは、太田村という田んぼの多い村を案内して下さいました。実は地図上に太田村というのはないのだが、新聞ではそう呼ばれている地域があり、そこは原発から二十キロ離れている。そこで採れる作物やお米は、一番多くて200ベクレル、平均でも70〜80ベクレルあり、口にするのは危険である。

しかし、行政は「五キロ圏内は危険でも、二十キロ圏内では人も住め、作物も食べられる」というイメージを作りたいという。それで、どうにかして太田村でも作物を作らせたい行政は、太田村と同じく原発から二十キロほど離れた村で米を作らせ、天皇に献上し、天皇が食べたというところで、「お前たちも出来るはずだ」と太田村の人たちに圧力をかけているとのことである。五キロより外は作物が食べられるというイメージを作りたいためである。

新潟大学が研究した結果、米の場合、セシウムは土からは吸収しにくく、水からは吸収しやすいということが分かったのである。太田村に流れ込む水は堤（つつみ）、沼、山のダムから来ているが、それらはすっかり汚染されている。だから、太田村の作物はセシウムを多く含むのだ。もし太田村で作物を作れというのなら、堤、沼、山のダムの水をまず除染すべきだが、それは国の定めた除染マニュアル

にないのでしない。除染もしないで、食物を作れというのは無謀ではないか。

住民の命より経済を優先するという行政のやり方を聞くたび、ただただ、あきれざるばかりであった。

南相馬を訪れたときのことを思い起すたび今でも、木ノ下さんが繰り返し言われた「復興と言うが、放射能汚染に対して、行政は開き直り、国はそれを応援している」という言葉が、私の頭を駆け巡るのである。

**③放射能のおそろしさ、国や行政の無責任さに、目と耳をささぎたくくなり、何も考えたくなくなる思考停止という名のおそろしさ**

我われが南相馬に訪れた日の朝刊で目にしたのが、「福島早期帰還九十万円を追加賠償」という記事だった。木ノ下さんに原発十キロ圏内を案内していただいている途中にその記



事の話題が出て、今まさに目の前に広がる荒涼とした光景

二〇一一年三月十一日のままの光景と、政府の原子力災害現地対策本部の打ち出した「福島早期帰還九十万円を追加賠償」という方針とのあまりのギャップに、梁河さんは「除染もしていない放射線量も高い、何一つ整備されていないのに、帰還とはいったいどういうことなのか」とただただ呆れるばかりで、あいた口がふさがらなかつたようだ。

梁河さんが呆れるのも当然だ。現在でも、福島第一原発では危険な作業が続いている。防潮堤も出来ていない。除染も出ていない。人も住んでいない。そんな状態で、自分だけ帰ってきても生活は全く不可能だろう。九十万円もらったらここに住めるかと言ったら、絶対に無理に決まっている。住民のことを全然考えていない無責任な政策だ。私にはそう思えた。

福島第一原発二十キロ圏内は、昼は往來を許されるが、

住むことは許可されていない。

盆と正月だけ例外で、宿泊できる。我われは原発から20キロあたり離れたところ、つまり人が住めるとされているぎりぎりのところも、車でいろいろと案内してもらった。

屋根の除染は、家の周辺の線量を下げるのにならり効果的であるが、金がかかるとの理由で、行政はしようとしれない。屋根と同様に線量を下げるのに効果的な方法が、家を囲む木を切ることであるが、費用が相当かかるから切れないのである。東電もその費用を出さない。切ったとしても、捨てる場所もないし、燃やすこともできない。九十万円を出すから帰ってこいと言う前に、国や行政はしなければならぬことがあるのではないのか？

車で、木ノ下さんの母校のそばを通った。学校の柔道場・剣道場を取り囲む木は、線量が高いとのことである。もともとこれらの木は、山から吹き下ろす

風から道場を守るためであった。ところが山全体が汚染されており、山から吹き下ろしてくる風はその放射能が乗って町にやって来て、それらの木に、その汚染された風が吹き付け、線量が高くなる。だから、道場の空気は特に風で土埃が立つと、かなり汚染された空気となるのである。

除染して一時線量が下がっても、結局また山から来る風で汚染される可能性がある。この問題は、百年や二百年では解決がつかない問題である。全く人間の手に負えないことが福島では起こっているのである。



積み上げられた汚染土。これをどのようにしたらいいのか。その答えは、まだ誰も出せていない。

案内も終りに近づいたとき、木ノ下さんは「ゼネコン、住民行政、ショッピングセンター、お店などなど、いろんな人の思い入れが交錯し、思惑が入り乱れ、何をすることがいいことなのか、本当のところはよくわからないのが現状ですね」とつぶやかれた。その言葉が今でも心に残っている。住民の安全を犠牲にして経済的な復興を目指している国や行政に対して怒りを感じた一日だったが、しかし、本当は誰も何をすることがいいことなのか、正しいことなのか分からない。どうすることが正しいのかを我われ人間が判断できる限界を遥かに超えてしまった、取り返しのでない出来事が起こってしまったのだ。我われが生きている間いや、もしかしたら人類がこの地球からいなくなっても、まだ地球は汚染されているかもしれない。

福島から茨城に向う車中、我われは無言であった。特に私は放心状態で何も考えられなかった。

放射能のおそろしき、国や行政の無責任さに打ちのめされてしまった。すっかり思考が停止してしまつたのである。しかしある意味で、これが一番おそろしいことなのかもしれない。今、この文章をつづりながら、決して見失つてはならないことがあるのを感じる。それは、国への問いである。福島第一原発の事故から起こつたから「こそ」、などという表現は使いたくないが、しかしこの事故がなかったら、原発に依存し続けたこの国の在り方を根底から問い直すということは私には起こらなかったのだ。その問いを思考停止によって見失わないように私は歩み続けたい。

最後に、どうしてもこのことだけは記しておきたい。

南相馬というと、すぐ福島第一原発の事故による被害を思い浮かぶが、津波で亡くなられた人は55人、加えて震災関連死亡が150人、海沿いの集落で全滅状態、集落ごと消えたところもある。今は跡形がなくても、確かにそこに人がいて、確かに人々の暮らしがあつたのだ。我われは決してそれを忘れてはならない。



寄稿

平野 喜之 さん

石川県かほく市高松、浄専寺住職。今回をはじめ、幾度も参加していただいております。

## ご協力のお願

「NPO法人 災害ボランティアネット」は現在も、東日本大震災によって傷ついた人々の支援活動を行っております。

そしてその活動を支えてくださる、「正会員」「賛助会員」も募集しております。

志のある方は、電話・ホームページからなどで一報ください。後日、詳細資料を送らせていただきます。

また、ご寄付も随時受け付けております。左の口座まで、よろしく願います。

(前号まで、口座番号を誤って表記してしました。謹んでお詫び申し上げます)

## 編集後記

『他人事として受け止めていかざり、決して根本的な解決にはならない』

震災後、様々な出会いの中からいただいた言葉でした。

震災からすでに三年、しかし原発の被害は終息のめどもたたず、公共機関の中には「臭い物にふた」でごまかそうとする動きも感じられます。

『ほんとうにそれでよいのか？ ほんとうに今のままでよいのか？』

痛烈な問いを感じました。  
(文責・大内崇久)

左にあるものは、NPO活動報告用ブログのQRバーコードです。どうぞご覧ください。



# ハハレンジャーの「願い」

放射線被ばくの影響を最も強く受けてしまう存在は、成長期の「子どもたち」です。

『子どもたちを、どうやって放射線被ばくから守ればよいのか』

『子どもたちに、どうやって安全な食事を用意できるか』

福島県二本松市でこの問題に取り組んでいる佐々木るりさんが、子供たちを守るために結成したのが、ハハレンジャーです。

五児の母であり、幼稚園の先生でもある佐々木さんは、園児のお母さんたちとともに様々な活動を続けています。

今回、我々が野菜を届けに行つた「青空市場」も、ハハレンジャー主催の市場です。「子どもたちに、放射能に汚染されていない、新鮮な食事を」という

願いから生まれたこの市場は、毎月十日・二十日に開催されています。



佐々木さんとハハレンジャーは、『セシウム0の園児食』を『めし』を作つたり、一年に数回、放射性物質に汚染されていない地域へ、子どもたちを保養に出したりして、地道な活動を続けておられます。



佐々木さんは語っています。

「今福島は、『風評払拭』ムード一色で、不安な声はあげにくい。私はそれがとても心配。

風評払拭だけに躍起になってしまうと、実害まで覆い隠されてしまうから。

気を付けなければならぬことと、気にしすぎなくてもいい部分とをちゃんと知っておきたい。風評と実害は分けて考えなくちゃいけないと思う。そうすれば、これ以上の無駄な被ばくは防げるはず」

「ある人は「もう福島に住むと腹をくくった」と話してしましました。でも、私は、諦めるという意味で腹をくくるのは違うと思うのです。子どものために一生何かをするという意味の「腹をくくる」じゃなければならぬ、って。

福島の人たちは、今もここに住んでいることの罪悪感を持っています。子どもを危険なところに住まわせているって。だから話したがるらないということもあります。でも、声が上がらなくても、何も考えてないわけはありません。

私は、一時的な運動や活動ではなく、一生、自分の生き方として福島のことを伝え続けなければいけない、「二度と繰り返さないで」と声を上げ続けなければいけないと感じています」

